

# オイコス・ノモス, オイコノミア, エコノミー

—概念の生成論的検討・序説—

深 貝 保 則

## 目 次

- |                                       |                                |
|---------------------------------------|--------------------------------|
| 1 はじめに<br>——「エコノミー」概念の検討に向けて——        | 3 補完たるべきいくつかのアプローチ             |
| 2 オイコノミア論, エコノミー論における<br>近年の典型的な2つの傾向 | 4 むすびとして<br>——類型的・段階的の把握の見通し—— |

### 1 はじめに

——「エコノミー」概念の検討に向けて——\*

「オイコス・ノモス」, 「オイコノミア」, 「エコノミー」——。これらのうち「オイコス・ノモス」や「オイコノミア」は今日ふつうに「経済」と呼ばれる事柄の西欧の言語における語源に当たると目されており, 「エコノミー」と「経済」とは辞書的に互に対応する語として日常的にも広く知られた言葉である。また, 英語の表示としては19世紀終盤以降, ディスコースの名称として「ポリティカル・エコノミー」から「エコノミクス」へと置き換える傾向が進みつつも, 前者もさまざまな意味合いで用いられていて両者が併存していることも知られている。経済成長もしくは安定的な発展がほとんど自明に思えた時期とは異なる昨今では, 「経済」のあり方を見つめ直し, あるいは活路を求めるような議論を構える場合に, しばしば「オイコノミア」や「経世済民」の言葉が持ち出されたりもする。

こうして一群の言葉が飛び交うが, では, これらが互いに同一もしくは少なくとも類似の意味内容を持ち合わせているのかということ, そうではない。たかだか名称問題ではありそうなのだが, ことはそれほど単純なものではない。これらの用語は時代文脈や関心のあり方によって

も意味の変化や表現の転用が生じ, しばしば活動や思考のまったく異なる領域へと移されて用いられることとなった。こういうわけで長い時の流れのなかで意味が変わってきたのであるが, この事態そのものを主題に据えて検討するに当たっては, 厄介なことに, 学術的な検討の組上に載せて行なうその議論のされ方自体も一

---

\* 小論の原型は社会思想史学会第37回大会(2012年10月27日—28日, 一橋大学)のセッションB「各国・各時代比較による近代社会思想史記述の試み」において, 「オイコノミア, エコノミー, および経済——領域と知の類型——」として報告された。当該のセッションと報告テーマは長尾伸一氏(名古屋大学)の采配により設定され, 討論者の役目は隠岐さや香氏(広島大学)に担っていた。また, 寺田元一(名古屋市立大学), 中山智香子(東京外国語大学), 堀田誠三(福山市立大学)の諸氏がコメントないし質問をお寄せくださった。2時間のスケジュールで1報告のセッションであったが, 小論は50分ほどで行なった報告のうちの冒頭の10分程度について説明的に立ち入った叙述を施したものである。

なお, 小論および予定されるその続編に盛り込まれる素材の収集作業および内容準備は, 2008年度~2011年度科学研究費基盤研究(A)「有機的ヴィジョンの構想力と経済統治のデザイン: 世紀末~戦間期経済思想の国際比較」(研究代表者: 横浜国立大学経済学部教授・深貝保則)の一部として進められた。

様ではない。「オイコノミア」を主題としていくつものアプローチのもとでの説明が試みられているものの相互に無関係のまま積み上がり、いまやこれらの概念をめぐる思想史的な検討もいささかの錯綜状況となっているのである。

小論は、「経済」に関わる領域がなにがしかの名称を付して呼ばれるその呼び方が一様ではないことに留意しつつ、古来、いったいどのような内容変化を伴っていたのか、また人間的な営為のなかでどのような位置づけを与えられながら観点を変えて扱われてきたのか、という問題に着目する。古典古代以来の関連するいくつかの概念がどのように段階的に変化を辿ってきたのか、その段階性に焦点を当てることによって、関連する諸用語の含意について思想史的に整理を施すべく、その作業のための試行的な見直しを探るものである。

なお、これを一段と広くいえば、小論はふつう「経済」ないし「エコノミー」と呼ばれる事柄を、いま地上に居合わせる人びとの活動の領域と、将来にわたる人びとの生存を支える（そして人間ばかりではなく、さまざまな種の生存をもないがしろにしない）領域、さらには自然そのものの持続を適える領域、これらのあいだの関わりのもとで意味づけるに当たっての基礎的な作業のひとつでもある。それはさしあたり、次のようなことがらである。——19世紀末以来の深刻な不安の自覚のなかで問われ続けたような、戦争や精神を蝕みかねない蹴落としあいなどによる人間存在の尊厳の危機は別としても、20世紀後半のある段階から、科学とその応用としての技術がもたらす利便的な恩恵や進歩への希望と、その裏腹に出現する新たな型の弊害とのあいだの緊張をいかに理解すべきか、さまざまに問われ続けている。だが、後者の弊害の側は公害が問題になった数十年前の時点では、産業活動のもたらす負の生産物が人間の生活条件を損なう事態に焦点がほぼ絞られていた。しかしいまや、人類による産業と消費を中心とした諸活動の集積がさまざまな生物の生存を危うくし、地球をとりまく環境にも影響を

及ぼしながら、さらにこれが現在および将来の人間の生存の条件をも揺るがすほどに、問題の型は質的に異なったものになりつつある。（だからこそ環境をめぐる、生物多様性をめぐって国際的な協議の場を設けることが必要だとされている。）この新たな問題は、しかし、20世紀終盤以降に突如として人類が遭遇した問題ではない。むしろ、人間がいかなる知識と資格に基づいて自然を利用することが許されるのかをめぐるジョン・ロックなど近代初頭以来の科学観と人間理解や、あるいは、神の創造のもとにあるこの宇宙のなかで人間はどのような位置にあり、宿命を負っているのかという神学的な理解など、文脈を異にし、形を変えながら久しく引き継がれてきた問題領域の今日的な現われでもある。この意味において、古来さまざまに変容しながら多様な姿を見せてきた「エコノミー」の領域は、今日的な文明のあり方、もしくは産業的営為を含む人間の諸活動のあり方についての問い直しという課題と深く関わっている<sup>1)</sup>。

ここで「いま」と「将来」とのあいだの関わりというに当たって、次の点に留意が必要である。つまり——「将来」が不断に「いま」になり替わるに伴って「いま」が「過去」に送り込まれていくばかりではない。「いま」が「いま」たりうるのは、むしろ先行するさまざまな「過去」におけるそれぞれの「いま」から脈々と引き継がれてきた、その累積があつてのことである。こうして「いま」を挟み込むかのように、あるいは「いま」の意味を両側から支えるかのように「過去」と「将来」とが横たわっており、場合によっては「いま」も「将来」におけるある時点の「いま」のために意味づけられるという構造は、「経済」ないし「エコノミー」にあつてもきわめて重要な意味を持つ<sup>2)</sup>。

1) これらの点をも念頭に着手したものとして、深貝保則「生存をめぐるエコノミー——近代の了解・再考に向けて——(1)」『横浜国際社会科学研究所』(横浜国立大学)第17巻第1号、2012年7月。

## 2 オイコノミア論, エコノミー論における 近年の典型的な2つの傾向

経済活動のあり方を考え直す糸口に「オイコノミア」や「経世済民」の語を持ち出す昨今の議論は概して、多少なりと語り手独自の観点から現代を取り扱うための一種の前置きもしくはキャッチ・フレーズとしてこれらの言葉を拝借ないしは援用するという性格が濃厚である。ここでは、たとえば社会あるいは「経済」はそもそもどのような意義を持ち、何を目的にした事柄であるのか、経済という領域に関わりあいを持ち市場を舞台とするような人間的な営為のあり方はどのようなものであるのか、この「経済」という行為は地上を舞台とする人類の生存活動の一環としていかなる制約や課題もしくは宿命を背負う領域であるのか、といった「経済本質論」とでも呼ぶべき事柄が論じられることは少ない。一種の経済哲学としての考察が掘り下げられるよりもむしろ、多くの場合、現下の経済状況や政治のはたらきなどについて、語り手自身が何らかの思い入れを込めてそれなりのメッセージを発することに主眼が置かれるものようである。そしてまた、歴史的に重みのあるはずの標語を借りるにしても、その歴史性自体に有難みを見出し、あるいは重みを引き受けるというわけではなく、むしろそれは、人びとを惹

2) さしあたり財の経済的な価値をめぐって主観的な評価に焦点を当てるといふ構えをとりながら、高次財から一次財へ向けての時間の連鎖を重視するカール・メンガーの議論などが参考になろう。「いま」は「いま」だけの都合ではないという、素朴といえは素朴なことがらではあるのだが……。この点について高橋正立『生活世界の再生産——経済本質論序説——』ミネルヴァ書房、1988年、とくに「先行(的)配慮」に触れた随所を参照。むしろ経済に関わるあらゆる理論的な認識が、時間の連鎖の重要性を明示的に捉えようとしているというわけではない。シュムペーターやマーク・ブラウグが呼ぶところの「同時化経済学」においては、むしろ、生産や取引に際して不可避的に要するはずの時間の構造をブラック・ボックス化しており、これもまた理論的な把握のスタイルのうちのひとつを形作っている。

きつけるべく目新しさを装い、威勢のよさを打ち出すための小道具にされているという具合である。

「オイコノミア」への関心の振り向け方についてのこのような傾向は、経済思想史研究の領域の諸議論においてもさほどの違いはない。「エコノミー」は古典古代ギリシアの「オイコス・ノモス」からの派生語であるといった事柄に触れ、あるいは「経済」の語はもともと幕藩制期の「経世済民」以来のものであるといった事実への言及は少なからず存在するのだが、これらもたいていの場合、こぼれ話か豆知識の披瀝に止まりがちである。自らが検討する主題を持ち出すための導入的な標語ないしは飾り付けとして使われてはいる。しかし、これらの用語が元来担ってきたはずの問題圏はそもそもどのようなものであったのか、それまでにさまざまな段階を経て変転を遂げた思想の重層とは際立って異なるような固有の問題圏が、自らが検討対象として据える思想家ないし学派のなかにどのように立ち現われるのか、にもかかわらず人間存在の物的基盤を支える営みとして古来、何が貫いているのか、などの諸点についての掘り下げが試みられることは稀である。あるいは、次のようにもいえよう。——実に多様な変転を見せた「オイコノミア」概念をめぐる久しい経緯のなかにあつて、思想史研究の検討の俎上に載せようとする当の思想は従前に担われた課題のうちの何を論じておらず、逆に、従前とは異なる形で観点を変えたり、焦点を絞込んだりすることによってどのように固有の特徴を帯びることになったのか、こうした緊張ある解明のために厚い蓄積を持つ「オイコノミア」論の重みと敢えて向き合うような経済思想史としてのアプローチは、残念ながら乏しい。

こうしてこの一連の言葉への言及は、実情としてはほとんど話のついでの飾り物に止まっているような状態であるが、とはいっても近年において、思想史として然るべく手続きをとって「エコノミー」の語義を確かめ、問題圏に踏み込むことに関心が寄せられることがある。概

して狭い範囲で展開していることでありながらも今日進められている本格的なアプローチとして、その試みは実は少なくとも2通りの——あいにく相互に結びついてはいない——流儀の併存状況にある。近代における経済学の生成事情のもとにおいて呼称や内容の変化を探る経済思想史あるいは科学思想史としての検討、および、神学に関わる斬新な解釈に示唆を受けての思想的な検討、この2つである。このうち前者はおおむね守備範囲をかなり狭く絞ったうえで文献上に見られる事実の発見・掘り起こしをめざすというスタイルであるのに対して、後者は神学におけるインプリケーションを捉え、大きな流れを描こうとする姿勢にある。ただし後者の場合、その傾向が依拠しようとするある斬新な枠組みが実に強烈で固有の問題関心に支えられているため、そのような性格のものであるということをお案することなく迂闊に用いると振り回されることになりかねない<sup>3)</sup>。

まずは近代の経済思想の生成事情を辿るという検討のひとつまとして——17世紀のアントワヌ・ド・モンクレティアンを偶発的な萌芽とし、18世紀半ば以降に広まるエコノミー・ポリティークもしくはポリティカル・エコノミーという表現以来、フランス語や英語の文献において本格的に展開した議論を確かめるといふスタイルの接近がある。このアプローチでは、クセノポン、アリストテレス段階における家政としての「オイコノミア」が近代的な統治のもとでの市場のあり方に関わる知へと置き換わった次第が示される。また、近代初頭に、とくにフランス語文献においていかに「エコノミー」概念が用いられたのかを掘り起こす試みも提供されている。しかしその反面、前近代とりわけキリスト教神学における類似の用語から近代になってからのそれへと、どのように概念

3) オイコノミアをめぐる近年の議論のいくつかはジョルジョ・アガンベンに強く示唆を受けているようなのだが、思想史的な系譜を捉えるうえで留意すべき点については第3節で言及する。

上の関連があり、また、どのように移行があったのか、という問題について掘り下げた注意が向けられることはほとんどない。そのためエコノミー・ポリティークもしくはポリティカル・エコノミーの登場をめぐる検討はしばしば、アリストテレス段階から18世紀フランスのいわゆる「エコノミスト」つまり重農主義段階の言説へと（もしくは19世紀にまたがって古典派、マルクス、もしくはオーストリー学派などの諸段階の経済言説へと）、一挙に繋げる議論になりがちである。言説の変容過程を語っているようでありながら、実際の経緯の中間項をスキップしているような按配なのである。

いまひとつの試みとして、哲学的、倫理的あるいは神学的な観点から「オイコノミア」への検討がある程度の範囲で進められている。とくに近年のこのスタイルは、ジョルジョ・アガンベンに斬新な著作『王国と栄光——オイコノミアと統治の神学的系譜学のために——』の登場（原書は2007年、2009年；翻訳の刊行は2010年）や、論者によってはそれに先立つミッシェル・フーコーのコレージュ・ド・フランスにおける講義録のひとつ（1978年）からも少なからず示唆を受けているものようである<sup>4)</sup>。アガンベンの議論を活用することによって、とくに中世の神

4) ジョルジョ・アガンベン著、高桑和巳訳『王国と栄光——オイコノミアと統治の神学的系譜学のために——』青土社、2010年。原著のGiorgio Agamben, *Il Regno e la Gloria: Per una genealogia teologica dell'economia e del governo* [Homo sacer, II, 2] は2007年にVicenza: Edizione Neri Pozzaから刊行された。なお、小論はアガンベンのこの書物についてもっぱら翻訳の恩恵のもとにあるが、手許にある原書はTorino: Bollati Boringhieriから刊行の2009年版である。

ミッシェル・フーコーの講義録は『安全・領土・人口——コレージュ・ド・フランス1977-1978年度講義——』（高桑和巳訳、筑摩書房、2007年）として翻訳されている。そのうちの1978年3月1日の講義においてフーコーは、ナジアンゾスのグレゴリウスに代表される「魂のオイコノミア」と、その概念の変化に関わる検討を行なった。アガンベンは『王国と栄光』第5章のなかで（訳、214ページ以下の箇所）フーコーのこの検討を踏まえている。



学における摂理の観点からオイコノミアに焦点が当てられ、当時の用語としては「布置」ないし「配剤」dispositio, dispensatio が重要なものであったとされる<sup>5)</sup>。ただし、このスタイルのアプローチにおいては——かなりのところはその依拠しようとするアガンベンAgambenの議論の特性によるところであろうが——キリスト教神学のもとでの議論、およびそこからの近代的な言説への継承ないし移行に注意が向けられる反面で、「エコノミー」に関わる言説のいまひとつの側面での継承ないし移行の次第が必ずしも説明されないという問題が残されることとなった。この点については、以下に日本における近年の研究のなかにこの2つの傾向がいかに現われているのかをみたくうえて、改めて触れることとしよう。

さて、日本における近年の研究文献のなかににおいても、オイコノミアの辿った変転に着目した検討として、これら2つの傾向がともに、ある程度は試みられていることを確認することができる。まず、しばらく前のものなのだが18世紀フランスの重農主義の生成状況を掘り下げる木崎喜代治『フランス政治経済学の生成』（1976年）がその導入部分において、ひとまとめに示した事柄ではある。かいつまんでその要点を確認すると、

——*économie* はギリシア語の *oikonomia* に由来しており、その本来の意味は「家計の秩序もしくは管理」であったが、やがてある統一体の秩序ある管理一般をさすようになった。統一体が宇宙である場合に *économie* は神の摂理を意味し、宇宙の秩序は神の統治の表現に他ならない。O.E.D.によればキリスト教では *economy* とは *dispensation* であり、*divine government* である。神の眼からみれば、*l'économie* と *le government* とは同じものなのである。しかし *l'économie*

が秩序一般を意味する以上、このことばを大宇宙ではなく特定の統一体に用いるためには一定の形容詞が必要となるのであって、*économie politique* はそのひとつである。

数ページという極めて概略的なものながら、この説明は上記2つの流儀を跨ぐ論点に触れている<sup>6)</sup>。しかしやはり、あまりにも概略的であった。そしてこのような事例を別とすると、近年のこの国の研究動向においてオイコノミア概念の変遷をめぐってある程度の範囲で検討がなされながらも、そのアプローチは2つの流儀のあいだで棲み分けが、というよりも没交渉が、横たわっている。ともかく、それぞれ簡単に見ておくことにすると——

前者の経済思想の領域に関わるものとして、とくにフランス語文献における「エコノミー・ポリティーク」用語の初出と目されるモンクレティアンMonclerをめぐっての検討があった<sup>7)</sup>。最近では経済思想あるいは政治思想の思想史研究のなかから、『百科全書』ヤルソーJarsolにおける「エコノミー」概念に焦点を当てた検討も再び提供されている<sup>8)</sup>。さらに英語文献に関わっては、ジェームズ・ステュアートの体系における「ポリティカル・エコノミー」の概念に着目した検討もある<sup>9)</sup>。これとは別に、近年の科学史研究

7) 山川義雄「アントワヌ・ド・モンクレティアンの「政治経済論」」『早稲田政治経済学雑誌』第244-245号、1976年1月。これにさきだてて、岩根典夫「モンクレティアン「政治経済要論」(1615)における富国思想と貿易政策論(1)」、『商學論究』(関西学院大学)第16巻第4号、1969年3月においても多少の言及がある。

8) 吉岡知哉「ルソーと政治——“ÉCONOMIE POLITIQUE”をめぐって——」、『立教法学』第34号、1990年1月；八幡清文「ルソーの「エコノミー・ポリティーク」論」、『中央大学経済研究所年報』第32号、2001年；大田一廣「『百科全書』におけるエコノミーの概念」、『龍谷大学経済学論集』第51巻第4号、2012年2月。このうち大田論文は、問題関心としてはアガンベンAgambenの設定に反応したものである。

9) 八幡清文「ステュアートにおける「ポリティカル・エコノミー」の概念——ルソーとの比較——」、『経済學論纂』(中央大学)第44巻第5・6号、2004年3月。

5) アガンベン『王国と栄光』、訳88ページ。

6) 木崎喜代治『フランス政治経済学の生成——経済・政治・財政の諸範疇をめぐって——』未来社、1976年、3ページ以下。

としての斬新な成果として、近代フランスにおける「エコノミー」用語の多面的な様相にも触れた隠岐さや香『科学アカデミーと「有用な科学」』が提供された。小論との関係でいえば後者において中心的に検討されるのは、いわゆる重農主義の学説の登場ののちの1780年代に、とりわけ『王立科学アカデミー年誌・論文集』誌を主な舞台としていかに多様に「エコノミー」が論じられたのかという事情をめぐってである。そしてその前史として18世紀初頭以来の様相についても紹介される。それによると、スウェーデンの博物学者リンネによって賢い家長のための家政術としての「エコノミー」が論じられるのに対して、エコノミー・ポリティークの影響下にあったモルレ師の1769年時点での索引整理などを経由して、広範なテーマが旧綴りの「エコノミー *œconomie*」のもとにリスト・アップされたという。こうして、「家政術としてのエコノミー、政治経済学、政治算術そ

10) 隠岐さや香『科学アカデミーと「有用な科学」——フォントネルの夢からコンドルセのユートピアへ——』名古屋大学出版会、2011年、第6章。ここでの引用部分は223ページ。

11) François Quesnay, *Essai phisique sur l'œconomie animale*, Paris, 1736. 「動物のエコノミー」を掲げる17世紀中葉以降の潮流については Germano Maifreda, *From Oikonomia to Political Economy: constructing economic knowledge from the Renaissance to the scientific revolution*, Ashgate, 2012, pp.199f.

12) このスタイルの試みとして、麻生博之編『エコノミー概念の倫理思想史的研究』、2007-2009年度科学研究費基盤研究(B)研究成果報告書補足論集、2010年3月。その延長線上にもたらされたものに、ラカンに連ねて論ずる佐々木雄大「交換と贈与——エコノミーにおける主体の概念——」、『理想』第685号、2010年9月；およびストア派からラカンに至る問題を射程に収める荒谷大輔『「経済」の哲学——ナルシスの危機を越えて——』せりか書房、2013年、など。また、これらとは独自に、小俣智史「セトニツキイによるフォードロフ解釈——オイコノミアとエコノミーの視点から——」、『ロシア語ロシア文学研究』(日本ロシア文学会)第44号、2012年が、1920年代のセトニツキイの議論を解釈する際にフーコーやアガンベンの視点を援用している。

の全てを包含したようなこの〈エコノミー〉研究群の1780年代における出現」がみられ、これはちょうど科学アカデミーのある種の転換期に当たっていた、というのが隠岐のこの点に関しての整理である<sup>10)</sup>。ちなみに『経済表』(「原表」, 1759年; 「範式」, 1766年)で知られるフランソワ・ケネーも、ボルドーで外科医として身を立てていた時期に「動物のエコノミー」を論じていた。「動物のエコノミー」の表現は17世紀の半ば以降のラテン語の書物のタイトルを手始めにフランス語や英語でも用いられ始め、ケ

13) 邦文の経済思想史文献においてもかつては、たとえば1920年代終盤の高橋誠一郎『経済学前史』(改造社版『経済学全集』第23巻, 1929年)のなかで「オイコノミア」概念をクセノポーン段階から辿る作業がなされていたし、これは古典古代についてであるがアルバート・トレーバーの学位論文(1913)を踏まえた谷口彌五郎『希臘経済思想概論』同文館、1924年もあった。むろん、トマス・アクィナスの経済学的側面に関しての上田辰之助『聖トマス経済学』刀水書房、1933年や五百旗頭眞治郎『キリスト教所有権思想の研究』学位論文(神戸大学)、1958年なども、必ずしも術語としてのオイコノミアに焦点を当てるわけではないながらも、逸することはできない。たしかにこれらを単に繋いでも、それでもなお初期教父からアクィナスに先立つ段階までの経済思想や「オイコノミア」に関わる領域については日本の研究の蓄積はほとんど空白ではあるのだが……。

なお、概して昨今の経済思想史研究の主題が、当然の流れとはいえ近代以降に成立ののちの経済学のさまざまな段階のテキストの解説と学説展開についての解釈へと関心を集中させ、精緻な学派研究、モデル化、ないし思想家に絞った研究として深められるのと裏腹に、近年では、より古い主題が検討の俎上から外れ、ほとんど忘却されたかのような観がある。そしてこの領域では、たとえば頻繁にアリストテレスなどに遡って鍛えなおす政治哲学などの研究領域に比してみた場合に、近代以降の特質を捉えるに当たっても看過しがたいはずのいくつかのコア概念や問題の立て方そのものを主題に据えての検討の稀薄さに繋がり、あるいは少なくともスタイルの違いが生じているものと窺われる。むろん、古き事柄の単なる素材発掘や詮索趣味だけでこれを補強できるわけではないのであるが、前史から通底する眠った主題を探り当てることによってこそ照らし出すことのできる問題群もあり得る。小論はこの意味での、問題史的な試みのための準備作業である。

ネーのそれはフランス語でタイトルに掲げる試みのうちのひとつだったのである<sup>11)</sup>。

次に、近年では「エコノミー概念の倫理思想的な研究」の設定のもとに、倫理思想をベースに置く側からの試みが提示されている。これはアガンベンを含みつつ（アガンベンはイタリアであるが）、とりわけ戦後のフランス語圏の哲学上・倫理学上の議論における「エコノミー」への関心を引き受けている<sup>12)</sup>。そのベースにされるアガンベンの議論において顕著にみられるように、これは従来の経済思想史の側のアプローチ、とくに近年のそれが注意を払ってこなかった事柄、つまり初期教父から中世にかけての神学のもとでの言説における「オイコノミア」の特質に焦点を当てる点においても、斬新な切り口を提供している<sup>13)</sup>。ただし、あとで触れるようにクセノポーン（あるいはクセノフォン）段階の「オイコノミア」が初期キリスト教に取り入れられて以降、近代の入り口にまで至る時期の「オイコノミア」論にアプローチするに当たっては、ユニークで強烈な問題関心を体現したアガンベンの議論に過度に依拠するわけにはいかないであって、この点に注意を払っておくことが必要であろう。

### 3 補完たるべきいくつかのアプローチ

ここまででみた2つのアプローチがそれぞれ進められつつも、これらは併存するに止まっている。そして仮にこの両者を単純に組み合わせたところで、古典古代からキリスト教教義のもとでの展開を経由して近代的な経済の言説に至る経緯をめぐっては、すでに言及したように繋がりがうまく説明しきれない面がある。一方では、アリストテレス段階から近代のエコノミー認識へ、市場を中心とする経済の構造変化を反映した経済的な知の革新がいわれる。他方では、中世の神学における「配剤」から近代の市場における摂理へと、説明のレトリックとしては継承面が示される。しかしまず、たとえば18世紀において家政術としてのエコノミーを論じるリンネのような事例の存在を、上記の2

つのパターンのみではうまく位置づけることができない。実際、神学上の「配置」ないし「布置」(dispensatio)と近代的な「経済」とが、表現上はオイコノミアないしエコノミーを共通項としておくという意味で相互に類似の用語のほずでありながら、どのようにして近代初頭以降にラディカルに意味を変えるに至ったのかという点は謎めいた事柄として残されることになってしまう。また、いまひとつの点として、近代的統治のもとにおいても、「エコノミー」の領域は価格をシグナルとした自動メカニズムというピュアな姿に移行したというわけではない。近代以降に固有のディシプリンとして形を整えてきた経済学が複線的なスタイルのもとに展開し、その政策的含意に関わってはしばしば現代にあっても「自由放任」か「政府干渉」かの両極をめぐって揺れ動く言説が飛び交っていることに示されるように、統治が経済に対して持つ役割をいかなるものとして理解するのか、またその理解に基づく観点から現実の統治にどのような診断を下すのかという領域は、重要な論点であり続けた<sup>14)</sup>。この2点を踏まえると、アリストテレス段階の古典的な統治あるいは国制の議論が、一方では「政治体」のレトリックに結びつく形で、他方では家政の学に身を潜めるか

14) 19世紀終盤のブリテンでは「自由放任」か「政府干渉」か、また大きな政府財政に支えられた福祉国家のスキームが問われた1980年頃からの先進国では「大きな政府」か「小さな政府」か、という形で論じられた。この議論は今日でも、規制緩和や市場原理主義への賛否をめぐる論争に表出するようにしばしば賑やかなものとなる。しかし、標語としてシンボル化されたこのような二者択一的な対立とは異なり、実際には自由主義的な経済思想の系譜においても、多くの場合、統治がどのように機能することによって「経済的自由主義」を適えるのか、という点をめぐる考察のほうが主題であった。たとえば自由主義的な経済論の典型としばしばみなされる19世紀中盤のブリテンにおいてすでに、J.S.ミルが『経済学原理』(1848年)の第5篇のなかで、経済活動の自由を確保するために政府による規制や干渉が必要とされるケースをめぐってのかなり長いリストを提示した。この問題はヘンリー・シジウィック『経済学原理』(1883



たちで、どのように近代の「エコノミー」言説に連なっていくのか、そして近代の統治がどのような意味において経済をコントロールし、あるいは飼いなすような思考を備えているのか。この次第を問う必要がある。思想上登場した素材としていえば、たとえば、18世紀中葉に亡命の境遇にあったジェームズ・ステュアートが提示した体系や、絶対王政の危機状況のもとで重農主義の観点から国家運営論ないし王国経営論を論じたデュボン・ド・ヌムールなどについては、「エコノミー」論としては「摂理」の系譜としてではなく、家産のそれにも似た国の運用もしくはやりくりの文脈で位置づけを与えたほうが座りがよい。

そこで、上述の繋がり悪さを補うことをも念頭に検討するに当たって、前節でみた2つの顕著なスタイルに加えて、近年の（といってもこの半世紀来ばかりのあいだに展開した）いくつかのアプローチが参考となろう。

第1に、オットー・ブルンナーが着目する「全き家」をめぐる議論を挙げることができる。ドイツ領邦国家の経済的基盤をめぐって重厚な議論を展開したブルンナーは、『社会史の新しい道』（1956年）に収録した「『全き家』と旧ヨーロッパのエコノミック」（Das „Ganze Haus“ und die alteuropäische „Ökonomik“）において、近代的な交換経済の全面化に先立つ時期に農学的な家産維持の知として一群の「エコノミック」論が存

年）の段階になると、自由放任は自由競争をおのずともたらずものではなく、むしろ独占の弊害を抑えるようなガイドラインないしは規制によって自由競争を保証しなければならないケースがある、との整理にたどり着く。19世紀末アメリカのシャーマン反トラスト法、戦後日本の独占禁止法などは、このような趣旨の理論的言明の制度的具体化に当たる。逆に、競争力ないし交渉力を備えるために団結を容認する（つまり、単体の個人の間での競争や交渉を自明視しない）労働立法のように、禁止ではなく容認のパターンによる制度的設定も、統治の側からの設計の一部たりうる。シジウィクに関して、深貝保則「シジウィクの経済社会論」、行安茂編『H.シジウィク研究——現代正義論への道——』以文社、1992年、とくに81-83ページ。

在したことを描き出した<sup>15)</sup>。少なくとも18世紀に至るまでの状況として、土地をはじめとした家産を持つ階層にとってはその資産管理のためにこと細かな知識あるいはノウ・ハウが必要とされており、このような家政の学が「エコノミック」に当たるというのである。そしてこの種の知は土地資産について責任を持って守ることと結びついているため、貴族的な精神の系譜から連なるものであるとブルンナーはいう。「全き家」への着目についてブルンナーは19世紀半ばのヴィルヘルム・ハインリヒ・リールによる指摘を援用するとともに、それよりも遡る17世紀、家政を論じるドイツ語の書物のなかにこの語が登場していたことにも触れていた。

「全き家」に関わって小論の展開のうえで有益なのは、次の2つの点である。まず、中世における神の摂理を誦い、あるいは神学上の「配剤」を見出す典型的な思考から、近代になってさまざまな「エコノミー」言説を経由しつつ本格的に経済的な言説へと漸進的に移行が展開した、というストーリーの裏面に、家政に関わる知の体系というレベルにおいてはクセノポン（およびアリストテレス）の枠組みでオイコノミアを語る系譜が脈々と、近代に至るまで引き継がれていた。この「家政」に関わる記述はむしろ体系だったものではないし、だからこそブルンナーはあれやこれやの知識の寄せ集めだと評するのだが、そうであるにせよ、少なくとも項目化され並べられた知のカタログという程度の体裁にはなっていた。この意味で「全き家」

15) Otto Brunner, *Neue Wege der Sozialgeschichte: Vorträge und Aufsätze*, Göttingen: Vandenhoeck und Reprecht, 1956に所収されているが、初出は *Zeitschrift für Nationalökonomie*, Bd.13, 1950においてであった。ブルンナーのこの書物はその中身と配列をかなり入れ替えたうえで1968年に第2版として刊行されているが、これにも当該の論説は含まれている。翻訳としては、第2版のうち2/3ほどを訳出した石井紫郎・石川武・小倉欣一・成瀬治・平城照介・村上淳一・山田欣吾訳『ヨーロッパ——その歴史と精神——』岩波書店、1974年のなかに、「『全き家』と旧ヨーロッパの「家政学」』として提供されている。



は、クセノポン以来の、そしてまたコルメツラなどによる緻密化を経たうえでの、家産管理の知識として系譜を形作っていたのである。

つぎに、政治体を束ねる為政者にとってはその政治体の秩序を維持し、政治体のもとにある構成員の生存と幸福、安寧を適えることが目的とすべきことであった。むろん実際にはその統治体制がしばしば暴政や衆愚政治、戦争などさまざまな混乱に陥ることによってこれらの目的は損なわれがちになる。しかし少なくとも建前としてこれら統治の目的を適えるための知が必要とされ、その際に、いわば大きくなった家族、大きな身体としての政治体を束ねるべき知識が提示されることとなった。こういう次第で、クセノポンの著作『オイコノミコス』は歴史上しばしば顧みられる存在となった。同様に、主人と奴隸、夫と妻、父と子の3つの「対」からなる「家」の維持に焦点を当てながら、家政の術からは区別されるものとしての「国」を束ねる政治の術へと議論を移していくアリストテレス『政治学』冒頭の議論も、伏線であったといえる。18世紀でいえば、ジェームズ・ステュアートの為政者像に現われるように、近代の「ポリティカル・エコノミー」も統治の側がその責任の対象たる政治体を維持するための「知」という側面を伴っている。ブルナーのいう「全き家」は、むろん家産の学の系譜における近代のドイツ語圏の言い回しではあるが、それにとどまらない。その発想は、しかるべく家政における家産の、そしてまた国制における国の基盤の、安定的な維持を支えるべき知の記述ないしは体系という議論の系譜を近代に伝える経路のひとつという意味を含んでいたのである。ちなみに、「動物のエコノミー」から議論を始めたケネーの「エコノミー・ポリティーク」が身体論的なイメージで経済の機構を説明しているのに対して、壊れやすい時計という機械仕掛けのレトリックで「ポリティカル・エコノミー」を語るステュアートの統治論は大きくなった家政のイメージで統治の経済的役割を捉えているものということもできよう<sup>16)</sup>。

いま「全き家」に関わって二つの事柄を補ったが、しかし、そのうちでとくに後者の側面が通例の経済思想史研究において扱われることは乏しい。経済学の生成展開をめぐっては、重商主義に代わって重農主義や古典派の経済学が登場したことをもって近代的な知としての経済学が本格的に成立したとみなすことが一種の通念となっている。そして当該の「オイコノミア」や「エコノミー」に関わる用語の検討をめぐってもしばしば、このことのある種の裏返し状況が生じる。つまり、官房学（カメラリズム）を家政のレトリックにより国家を捉える「遅れた」知として処理し、結果的には検討を避けてきたために、「オイコノミア」という設定が本来的に抱いていた家政の（そして、大きくなった家政としての国制の）管理という側面がいかにも、どの程度の意味において近代の思想圏へと一定の継承性を持って流れ込んでいるのかという問題領域が軽視されることとなった。市場の原理を語るものが「経済学」の本格的成立だと考えるのはむろん説得性のある立場表明であり得る。しかし、一般にあって、重層的に入り組む人間的行為の理解に努めた古来の知の系譜を読み解くという思想史的な課題を構える場合に、到達したある型を基準とし、過去を裁断することに縛られると、ともすれば、それ以前の思想圏が向き合った課題の拡がりを見落とすことにもなる。オイコノミアやカメラリズムをめぐる検討も、このような、ある基準を構えて裁

16) 近代における機械論的ないしは原子論的な社会観と身体的、有機体的な社会観とはしばしば極端に対立的なものとして理解されがちである。しかしトマス・ホップズがその『リヴァイアサン』（1651年）の序説で掲げたように、時計のレトリックは単に機械仕掛けとしてではなく、身体の働きや諸器官の役割分担の巧みな組み合わせと重ね合わせて説明される。また、近代以降の有機的な社会イメージには、秩序、役割、循環、進化など多様なスタイルがある。後者の点については深貝保則「有機的な社会ヴィジョンと経済倫理」、柘植尚則、田中朋弘、浅見克彦、柳沢哲哉、深貝保則、福岡聡『経済倫理のフロンティア』ナカニシヤ出版、2007年所収において概略を示した。

断する型のスタイルによって処理されがちである。市場の原理を捉えるべきものとしての「ポリティカル・エコノミー」ないし「エコノミクス」を基準に据えると、そのフレームワークから見える要素が前史たるべき「家政学」ないしは「オイコノミア」や統治の学としての官房学には含まれるものが乏しい、といった評価に押し込めることになりがちである。しかしこの処理においては、古来の単線的ならざる継承、変形、発展、残存、回帰の様相を捉えることが著しく難しくなり、思想史研究を構えること自体の意義も乏しいものになってしまう。

これに対してここで、家政の包括的把握の古典的標準形としてのクセノポーン、および、「家」と区別を含みつつ重なり合うものとしての「国」という語り口のアリストテレス、このそれぞれの議論が近代初頭にあっては「オイコノミア」への関心の秘かな底流を担い、「全き家」の表現をも産み出していたことに着目しておこう。中世終盤の小アジアにおけるアリストテレスのテキスト群の発見をもおそらくは契機として、それから数世紀のあいだ、クセノポーンやアリストテレスの「オイコノミア」への一定の関心の高まりがあった。17世紀におけるドイツ語の「全き家」*das ganze Haus*の表現は、ラテン語文献に替わって各国の言語による著作が多く出回り始めるなかで登場したのだが、その初期のある書物ではクセノポーンの『オイコノミア』への言及と並置される形でこの語が用いられたのである<sup>17)</sup>。

近年の注目すべきアプローチとして第2に、クセノポーンに代表される古典古代の「オイコノミア」と、キリスト教神学における「摂理」、「配剤」に示される議論との関わりをめぐって、前者がいかに関後者に入り込み、あるいは移行していったのかを探るうえでの緻密で有益な検討

17) Joanne Colero, *Œconomia ruralis et domestica: darin das gantz Ampt aller treuer Hauß-Vätter und Hauß-Mütter beständiges und allgemeines Hauß*, ..., Mayntz, 1656, s.102.

が存在する。『旧約聖書』に体现されるユダヤ教の教説のなかにギリシア古典古代の影響が及ぶに当たっては、むろん紀元前3世紀のアレクサンダー大王の東方への遠征が、とりわけある種の文化的コスモポリタニズムともいうべきその支配のあり方が、まずは伏線としてあった。そしてイエス・キリストの死（と復活）ののち、生前のイエスに対しての迫害者だったもののやがて回心を経て異教徒に対しての熱烈な布教を担うことになったパウロの教説こそは、初期キリスト教の生成期にあつてヘレニズムの伝統との接点を果たすこととなった。こうして『新約聖書』のパウロ書簡を経路に、クセノポーン以来のギリシアのオイコノミア論が、そしてまたキケローに表出したローマの「配剤」をめぐる考察が、生成期のキリスト教世界へと橋渡しされつつ、やがて初期教父の教説を介して練り上げられていくこととなる。近年この観点から、とくに初期キリスト教教義におけるパウロ書簡に端を発したオイコノミアの意義に焦点を当てた研究が存在する。それらはいずれも本来的には神学もしくは聖書学としての成果であつて、半世紀あまり以前の、アメリカのPhD論文にしてもずいぶんと重厚なジョン・H.P.ロイマンの『ギリシア語原典から紀元1世紀に至るオイコノミアおよび関連用語の用いられかた——教父による利用のバックグラウンド——』（1957）<sup>18)</sup>、および不思議と2005年頃に相次いで刊行されたゲルハルト・リヒテルの『オイコノミア——新約聖書、教父および20世紀に至

18) クセノポーン、アリストテレス段階から数世紀の時を経たこの時期に至るオイコノミアに関する議論の展開については、かつてジョン・H.P.ロイマンがペンシルベニア大学に提出したその破格に重厚な学位論文において主題的に検討を加えた。John Henry Paul Reumann, *The Use of Oikonomia and Related Terms in Greek Sources to about A.D. 100: as a background for Patristic applications*, PhD dissertation presented to the University of Pennsylvania, 1957. タイプライターで印刷（ギリシア語部分は手書き）のこの学位論文は、目次などを除いて本文だけで613ページに及ぶ。

る神学上の著作におけるオイコノミア用語の使用——』(2005)やカリン・レーマイエルの『オイコスとオイコノミア——家政管理の古代の概念とパウロにおける共同体の構造——』(2006)などである<sup>19)</sup>。むろんそれぞれに重厚なこれらの研究を本格的に摂取し、活かすためには多くの準備を要するところではあるが、古典的な「オイコノミア」がいかにか複線的・重層的な経路と変形を経て近代の言説へと入り込んでいくのかという限定的な目的にとっても有益なものである。

ところで、アガンベンも含め、古典古代からキリスト教の展開過程にかけてのオイコノミア概念の様相に関わる重厚な研究文献が、偶然にも2005年からの3年間のあいだにいわば同時発生的に登場したのだが、この刊行年次の近接のために、アガンベンの『王国と栄光』(Giorgio Agamben, 2007, 2009 = 訳, 2010)はリヒテル(2005)の存在には言及しつつも内容的に踏まえる時間はなかったといい、レーマイエル(2006)については言及もない。近年の、とくに日本語文献によるオイコノミアへの関心のなかではこのうちでもっばらアガンベンのみが参看されているのであるが、アガンベンに固有の問題関心に寄り添うのであればともかく、思想史的な整理の軸を「オイコノミア」に焦点を当てて描こうという場合には実はアガンベンはそれほど使い勝手がいいものではない。アガンベンの考察は固有に問題提起的で鋭角的な切込みに満ちており、これを地図にたとえていえば、玄人好みの名跡を際立たせて同好の士のみに通じる案内図のような仕立てである。「オイコノミア」に関わってさまざまなテキストのあいだでどのよう

に用語が移ろっていったのかという事実的な確認を行なううえでは、いわば方位や距離感が正確な地図にも似たりヒテルやレーマイエルらの著作のほうが役立つ。もっとも、ともにずいぶんと重厚にして仔細なものであって、手ごろとは言い難い手引きのような趣きがある。このような精密地図を理解して読み解くためには別途、その前提知識を得るためにバイアスのかからない概略図といった体裁のものが必要なほどなのではあるが……。いうまでもなく、これらのことは小論の目的という都合のもとで近年の関連文献を踏まえるに当たってのそれぞれの特徴についてであって、優劣の評価を述べているわけではない。

この点についていまだ少し説明を加えておくと、アガンベンの当該著作は原書タイトル・ページに示されるように、『ホモ・サケル』の設定のもとで統治ないし権力をめぐって展開される一連の考察の、その構成要素のひとつとして位置づけられたものである<sup>20)</sup>。そして焦点は、統治が喝采といかに結びつくのかということに向けられている。この問題は古典古代ローマにあっても生じた事象であり、アガンベンは初期キリスト教からの展開のなかでいかに王国的統治が栄光もしくは喝采と深く結びつくこととなったのかを掘り起こすのだが、同時にこれは現代の、とくに20世紀前半のファシズムに至る政治的精神的緊張のなかにおいて発現した問題でもある。アガンベンの議論には、オイコノミア概念そのものの変遷への関心というよりもむしろ、カール・シュミットの『政治神学』(1922年)に対してエリック・ペーターゾーンが「政治的問題としての一神教」(1935年)において投げかけた批判がもたらした緊張が色濃く漂っている。このことから窺われるように、『王国

19) Gerhard Richter, *Oikonomia: der Gebrauch des Wortes Oikonomia im Neuen Testament, bei den Kirchenvätern und in der theologischen Literatur bis ins 20. Jahrhundert*, Berlin: Walter de Gruyter, 2005 および Karin Lehmeier, *Oikos und Oikonomia: Antike Konzepte der Haushaltsführung und der Bau der Gemeinde bei Paulus*, Marburg: N.G. Elwert Verlag, 2006.

20) イタリア語版原書ではタイトル・ページに *Homo Sacer*, II, 2 と記載されている。日本語訳のタイトル・ページにこの表記はないが、むろん訳者の高桑和巳氏は凡例や翻訳者あとがきでこの点を明記している。



と栄光』の焦点は現代の統治と社会のあり方を問うことに向けられており、まさにアガンベンの『ホモ・サケル』の一翼を担っているのである。アガンベンによる素材の取り扱いはこの特徴を反映しており、これは一例なのだが、オイコノミア概念の展開のひとつまとしてキケローの言説の意味を探るに当たっても次のような具合である。——中世におけるオイコノミアの概念は秩序だてて配置（布置）する神の摂理にこそ本質があるとみなされているが、この「布置」（dispositio）の概念はそれに先行するキケロー「発想論」のなかの一節に見られるとアガンベンは指摘する。オイコノミア概念の漸次的変容を捉えるうえでも重要な手掛かりとなる着眼をこのように示している反面、アガンベンにあっては典礼的喝采に関わるものとしてキケローに言及するペーターゾンの議論を紹介する場合を例外として、キケローの議論それ自体が検討の対象とされることはない<sup>21)</sup>。カリン・レーマイエルが示すところによると、20代に差し掛かった頃にクセノポーンの『オイコノミコス』をギリシア語からラテン語へと翻訳したキケローは、その翻訳と同じ時期に執筆した『義務について』（*De Officiis*）のなかで古典的な主題としてのオイコノミアをめぐる考察を展開した。だが、この論点をめぐってアガンベンが考察を進めることはないのである。なお、レーマイエルはその『オイコスとオイコノミア』において、キケローの義務論におけるクセノポーン的な要素とアリストテレス的要素をめぐって掘り下げている<sup>22)</sup>。

そのほか第3に、ビザンチン世界の東方キリスト教においてオイコノミアがどのように論じられたのかという問題は長らく手つかずの状態であったというが、近年、この点についても試みが展開している。これは、教父の教説からトマス・アクィナスに至るカトリシズムの系譜

や、宗教改革を契機としてプロテスタンティズムの禁欲倫理に着目するヴェーバー・テーゼなど、ローマを軸とし、あるいは西欧の近代的市場の生成に焦点を当てる通例のイメージに対して、その裏面史を掘り起こす意義を担いうるものでもあろう。ビザンチンの思想系譜は古典的なオイコノミア論をドイツの領邦的な家産におけるそれへと伝えるような、一種のバイパスとして機能した可能性を秘めているのかもしれない<sup>23)</sup>。

また第4に、近代の科学革命と結びつけてオイコノミアが経済の理論的な把握へと推移していく次第を明らかにしようとの試みもある<sup>24)</sup>。ただしこの場合、経済的な言説のどのような様式をもって科学革命と対応するものとみなすのか、また、自然現象ならざる人為の事象としての経済をどのような方法観で捉えることが科学的だといえるのか、など、多くの論点を含みうる。付随していえば、19世紀末以来の経済学の革新と展開のなかでやがて数理的手法が広く受け入れられることになったのであるが、近代の当初の科学革命段階においてはこの手法は、社会事象に関しても用いることができるものとして受け入れられていたわけでは必ずしもない。その反面で、神の摂理のもとにある自然

23) この点については、中世ビザンチン世界における社会・政治哲学を扱った Malcolm Schofield (ed.), *Justice and Generosity: Studies in Hellenistic Social and Political Philosophy, Proceedings of the Sixth Symposium Hellenisticum*, Cambridge University Press, 1995 があり、とりわけ Calro Natali による *Oikonomia in Hellenistic political thought* が参考になる。この試みののち、リヒテル (2006) において初期ビザンチンにおけるオイコノミアの教説についての検討も現われた。

24) さきに掲げた Germano Maifreda, *From Oikonomia to Political Economy*, 2012 はこの観点からの試みである。このマイフレダの著作はもともと2010年にイタリア語で刊行されたものである。また、前掲の荒谷大輔『「経済」の哲学』2013年はその第1章第2節の後半で、ルネサンス期のブルーノからケネーに至る諸議論のあいだに「自然のエコノミー」の見方が通底していたとする。

21) アガンベン『王国と栄光』高桑訳、49ページ；320-321、330-331ページ。

22) Lehmeier, *Oikos und Oikonomia*, S.122f.

の謎を神ならざる人智によって捉え、あるいは神とは程遠い人為の領域にも宿っている神の摂理の恩寵を窺い知るためには、蓋然的・統計的な知の手法こそが認識の手段として頼られるべきものだと考える立場が、比較的早く17世紀から存在していたという側面もある。これらの諸点はしたがって、神学段階における「摂理」ないしは「配剤」としての「オイコノミア」がいかにか人為としての「エコノミー」へと姿を変え、あるいは入れ替わっていくのか、という問題圏を形づくっている。

第5に、経済学が19世紀終盤以来英語圏では「エコノミクス」と呼ばれるようになった経緯に着目する議論もある。実際、18世紀半ば以降に本格的に成立した経済学という学問領域を表わす表現としては、当初はフランス語における「エコノミー・ポリティーク」と並んで英語では「ポリティカル・エコノミー」が広く用いられたけれども19世紀終盤からの英語文献では多くの場合に「エコノミクス」が用いられるようになった。この変化についても、日本では早坂忠と山田雄三との間の論争など1980年前後にいささかの議論が行なわれ、表現上の変化と内容上の変化とのズレを伴った様相もむろん問われている<sup>25)</sup>。ただし、同じヨーロッパ圏の言語のなかでも「エコノミー・ポリティーク」の表現を用いていたフランス語文献では——ワルラスのように典型的に新しい型と目されてもおかしくない著作を持ち合わせているというのに——英語表現の変化に対応した表現上の変化は見られず、ドイツ語の場合には「エコノミー」

以上に「ヴィルトシャフト」のほうがむしろ多く用いられる<sup>26)</sup>。そしてイタリア語では18世紀以来の該当する用語のありようが独特で、「エコノミア・チビレ」、「エコノミア・ポリティカ」、「エコノミア・プブリカ」といった表現が入り混じった<sup>27)</sup>。こういうわけだから、近代的な形を整えた経済学のその一層の近代性の指標として「エコノミクス」へと用語上の変化があったことを挙げるにしても、その変化自体はある程度限定的な意味を持つに限られよう。むしろ18世紀以降に展開したディスコースのなかで、それぞれの時期ないしはスタイルの言説が経済的な事象のうちのどの側面に焦点を当て、どのような方法を据えているのかという意味での質的な変化の段階性を主題的に検討することは固有の意義を持っており、そして名称の変化もその検討に当たっての重要な手掛かりのひとつではある。また、この用語上の変化は狭義の経済学のなかでの内容上の変化として検討されるのが近年の流儀であるけれども、古典古代以来の多層的な用語の変化と「経済」を語るべき科学観の変化をめぐるより大きな射程のもとにおいても検討されるべき事柄であろう。

25) その論争の簡潔な紹介的検討として、美濃口武雄「エコノミクスとポリティカル・エコノミー——山田・早坂論争をめぐって——」、『一橋大学社会科学古典資料センター年報』第7号、1987年3月。

26) ドイツ語圏での用語法をめぐってさしあたり、橋本昭一「Politische Ökonomie, Volkswirtschaft, Nationalökonomie」、『関西大学経済論集』第28巻第5号、1978年12月。（これは日本語で書かれたものである）

27) イタリア語文献で書物のタイトルとして登場した指標としては、*economia civile*（アントニオ・ジェノヴェージ、1768年）、*economia politica*（ピエトロ・ヴェッリ、1781年）、*economia pubblica*（チェザレ・ベッカリーア、1804年＝死後出版）といったところである。この時期のイタリア語文献もしくはイタリアにおける経済思想に関して、堀田誠三『ベッカリーアとイタリア啓蒙』名古屋大学出版会、1996年や、奥田敬の一連のもの、たとえば「18世紀ナポリ王国における「政治経済学」の形成——アントニオ・ジェノヴェージ『商業汎論』とその周辺——」（上・下）、『三田学会雑誌』第79巻第5号、1986年12月、第79巻第6号、1987年2月、など。このたび、黒須純一郎『チェザレ・ベッカリーア研究——『犯罪と刑罰』・『公共経済学』と啓蒙の実践——』御茶の水書房、2013年に加わった。ベッカリーアの出版された『公共経済学』が孕むテキスト編纂上の問題については、黒須、第2部第3章に記載がある。

#### 4 むすびとして

##### ——類型的・段階的把握の見通し——

ここまでで近年、といっても最近の半世紀ばかりにおいて提供されたオイコノミアに関わるいくつかのアプローチを挙げた。むろんこれは網羅的な分類やリスト・アップではない。今日の専門分化が進んだディスコースのなかでそれぞれに行なわれている当該主題について、今日的な専門性という事情よりも主題そのものが求める一体性を念頭にアプローチを試みるに当たっての、手掛かりを確認するための作業であった。以下ではこれらを参考にしつつ、古典古代以来の「オイコノミア」ないしは「エコノミー」をめぐる問題圏を段階的・類型的に捉える見通しを付けることとしよう。この作業に先立って二つほど、あらかじめの補足を行なっておく。

第1に、この考察は近代的に成立したディスコースとしての「経済学」を基準とするものではないし、その守備範囲に該当する素材を切り出して古くからの言説の動きに絞るものでもない<sup>28)</sup>。すでに見てきたように「オイコノミア」という主題は、非常に幅の広い事柄を含みつつ、時代状況あるいは言説の文脈のもとで設定も語り口もさまざまに移ろっているのであって、この状況を特徴的に捉えるための目安こそを探る

28) 古典古代ギリシアや中世のカトリシズムについて、経済論の観点から掘り起こす研究もむろん可能であるし、実際に行なわれている。英語圏における比較的近年の代表的なものとして、Odd Langholm, *Price and Value in the Aristotelian Tradition*, Oslo, 1979; S. Toon Lowry, *Archaeology of Economic Ideas: the classical Greek tradition*, Durham: Duke University Press, 1987など。日本語による一定の切り口からのものとして、有江大介『労働と正義——その経済学史的検討——』創風社、1990年のうち、アリストテレスやトマス・アクィナスなどを扱う前半諸章。なお、後者については理解を異にする点もあり、深貝保則「書評：有江大介著『労働と正義——その経済学史的検討——』」、『社会思想史研究』第15号、1991年に示した。

のが、これからの作業である。なお、ヨーロッパの「オイコス・ノモス」、「オイコノミア」、「エコノミー」といった一群の言葉に対応する日本語の表記をめぐっても、とくに開国・維新期の神田孝平（かんだたかひら）の手になるウィリアム・エリスの翻訳の『経済小學』（1867年）や西周（にしあまね）が『百學連環』（1870年）で示した「制産学」など以来<sup>29)</sup>、「理財学」という表現なども含めて複雑な問題を含む。また中国語も含めれば19世紀末の日本への亡命者でもあった梁啓超による「生計学」の呼称などもあるが、ここではこれら極東における西欧の知との接触をめぐる諸事情については棚上げとする<sup>30)</sup>。

第2に、ここでは対象を、時期的にいえば古典古代ギリシアのクセノポーン（あるいはクセノフォン）やアリストテレスを起点に置くのであるが、時期的な終点としての区切りを1930年代半ばに据える。むろんこれは、2000年を超えるすべての議論がその時期に収斂していくから、という意味ではなく、いささか便宜的である。それでもなお、1930年代半ばを終点とする理由は次の3点である。まず、(i) とくに英語圏の経済学にあっては19世紀後半以来、節約性ないし稀少性に「経済」概念の基幹的な特質を見出すという方向へと波状的に展開したのであるが、この変化の到達点を集約的に表現したとふつうみなされるライオネル・ロビンズの『経済学の本質と意義』が刊行されたのが1932年であって、指標として目安になるか

29) 西周はアンシクロペディーに名を借りて『百學連環』と題した書物のなかで、エコノミーの語がオイコスとノモスの合成にその起源を発することについても、ギリシア語綴りをも示して触れている。蘭学の系譜の伝統があるとはいえ、開国後ようやく15年ばかりを経たという時点でのことで、当時のキャッチ・アップの拡がりの一端を窺わせる。

30) 中国および日本における「経済」に関する呼称をめぐって仔細な検討を施した最近のものとして、阿部弘『経世済民論と経済学』創成社、2010年。



らである。また、(ii) 近年の「オイコノミア」あるいは「エコノミー」の主題に関する関心はアガンベンの『王国と栄光』によってある範囲では加速されているのだが、そのアガンベンのユニークな設定は、カール・シュミットの『政治神学』（1922年）に対してエリック・ペーターゾンが「政治的問題としての一神教」（1935年）などによって投げかけた批判の孕む緊張を色濃く反映しているからである。なお、シュミットの反論は時を隔てペーターゾンの死後、1970年になってようやく現われたのであるが、ここでの問題史的な概観の対象としては1935年で区切っておいてよいであろう。さらに、(iii) 1940年代以降を対象としない事情として、次のような状況がある。おおむね1940年代以降、「エコノミクス」の型をとった経済学としての「エコノミー」の加速度的な展開がみられ、これはこれで古来の「オイコノミア」の変転とは異なる新しい独自の様相を呈している。その裏面で、19世紀末以来育ってきた文化人類学は市場の、そしてエコノミーの、近代的な見方を相対化する意義を持つこととなったのだが、それと並んでとくに1930年代から徐々に、エコノミーを人間の存在根拠を問うべき軸のひとつに組み込む現象学の知見がとくにフランス語圏の議論のなかで展開しており、これもまた、独自の領域を形作っている。いずれにせよ、1930代もしくは1940年代あたりからそれぞれに展開している議論は、「エコノミー」をめぐって相互にはほとんど関わらない別個で新たな領域としてその姿をなしているのである。

以上の事情を踏まえ古典古代以来1935年までをおおむねの射程に収めて、小論の締めくくりとして、「オイコノミア」もしくは「エコノミー」の思想史的な様相を類型的・段階的に描き出すための目安を箇条書き的に示すこととする。

#### 1) 古典古代ギリシア、ローマにおける言説の登場と変化……

クセノポーンの『オイコノミコス』、アリス

トテレスの『政治学』とりわけ第1巻などにおける古典的な言説の登場。アリストテレスの『経済学』と呼ばれる、偽アリストテレスの著作、キケロー『義務論』における継承、コルメツラなどにおけるクセノポーン流の農業技術の緻密化

#### 2) キリスト教教義との融合と変容……

『新約聖書』とりわけ「パウロ書簡」における摂理と管理の緊張を含む記載、および初期教父時代以降の言説とビザンチン圏への波及。この流れのなかで「摂理」を語るその語り方において、キケローの用語が援用される。

#### 3) 中世後期、あるいはルネサンス期……

オイコノミアに関わる神学的教義体系の到達形態、とくにトマス・アキナス、および、テキストとしてのアリストテレス回帰。当時の文献的な新たな事情のもとで、アリストテレスの名を冠した『オイコノミア』のラテン語版が多く出され、注釈書も作られた。併せ、家産所有をめぐるオイコノミア論としての、クセノポーン流の古典的主題の復活・継承もみられ、「家政学」の系譜を生み出していく。

#### 4) 近代科学の登場前後……

中世終盤のブルーノなどを起点として、自然認識のある種の合理的理解が神学のなかから始まり、オイコノミアの主題もやがてその観点から照明を当てられる。摂理の神学的含意（神慮のもとにある宇宙＝ユニヴァース）の自然の摂理への切り替え。神ならざる人智による理解の型としての、蓋然性や数学的に表現される整合性への着目も現われ、これはのちの、19世紀終盤以来の経済学の新しい型に繋がる面がある。また、17世紀終盤から18世紀半ばにわたる時期に至って、とくにフランスにおけるさまざまなエコノミー論の族生。そのなかで遅れて登場することになるものとしての、社会ないし統治に焦点を当てたエコノミー論（*économie politique, political economy*）。

- 5) 近代国家の運営のための知、ならびに市場の領域における秩序あるいは法則性に焦点を当てた理解の深まり……

官房学の文脈に根付いたオイコノミア、近代における国家財政および経済圏の運営としてのポリティカル・エコノミー論、そこでの「采配」の意味。また、対象としては部分的に重なり合いながらも発想としては異なるものとしての、市場の摂理に焦点を当てた近代的にして本格的な「経済学」の生成・展開。

- 6) 経済学の方法化とその裏面における政治神学の緊張……

市場の摂理に絞り込む「知」の成熟、ディスコースとしての名称問題、そして節約性・稀少性としての定式化をバネとした、新しい姿のディスコースの抬頭。さらに20世紀前半に展開する経済学の方法化の裏面史、

つまり全体論と政治神学の文脈におけるエコノミー論、オイコノミア論に表出する社会的、精神的な緊張。

ここに掲げたような目安をもとにして、具体的にテキスト群と向き合う作業に、稿を改めて着手することとする。さしあたりの課題は、アガンベンに対してリヒテルやレーマイエルの著作に関わって触れたように、精密地図に至る前の概念図を試みることである。むろんその場合に原資料に関しては古来の膨大なテキスト群のうちいくらかを、あたかもボーリング調査のように試みることになろうが、小論で触れたいくつかの研究文献は、この作業にとってのそれぞれの役回りでの道案内役となってくれるはずである。

(横浜国立大学大学院国際社会科学研究院教授)